

するほどである、一種香百合の如きは芳香室に満ちて人をして恍惚たらしむるばかりである、花が衆芳を凌ぎ華麗愛すべきのみではない、百合の中には甚だ美味であつて昔から調理の要品として珍重せられたものが多い、山百合、平戸百合等は其の一例である巻丹は少しく苦味あれども食することが出来ます。

又百合の鱗片を擦り碎いて袋にて濾せば澱粉を取ることが出来る、此の澱粉は色極めて白く味佳く甚だ上味なもので、葛蕨馬鈴薯、山慈姑などの澱粉に較ぶれば優ること數等である。

百合は斯様に花が奇麗で根球は味良く殖え方面白く植付けること容易いものですから少しく庭園を有せらるゝ人は試に植えられたならば中々興味あることであらうと思ひます。

草むらや百合はなかく花の願

俗にいふ、うどんげの話

東海生

世間で俗に云ふ、うどんげの花が咲くといふ事は、どんなことであらふか、うどんげの花がさく年は、豊年であるとか、凶年だとかいつて居る、吾々も時々そんなことを尋ねらるゝことがある、われは眞實花のさくのであらふか、それとも、蟲などのする仕わざであらふか、といふ疑を普通の人は持つてゐる、でありますから俗にいふ、うどんげの花のことを少々お話致しませう。

うどんげの花といふのは其の實は花ではないのです、全く昆虫の内で、くさかげろうといふ、とんぼの小さなのを見た様な虫が産みつけた卵であ

る

くさかげろうといふ虫はとんぼを小さくした様  
であつて翅は大層薄くありまして、其の翅を透し  
て他のものを見る、ことが出来るので、丁度ガラス  
板の薄いの、様に見えます唯ガラス板と異なる所  
は、其の翅の内を幾筋も糸の様な脈が通じてゐる  
ことであります。

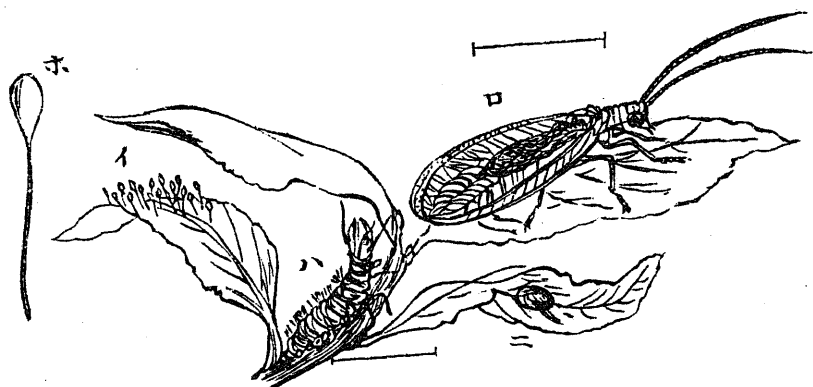
此の糸の様な脈は其の内を血液が流れてゐて翅  
を養ふ、ためなので丁度人間の血管が手足などに  
て見ゆるのと同じであります、くさかげろうの翅  
にある脈管の色は緑色に見えることがある、緑  
に少し黄色をさして見えることがある夫れから又  
肉色に見えることがある、之れは、からだの色が  
反射したがために起ることで其の實は一色であ  
る、からだの色は草の様な緑色をしてゐる、そし

て其の上をば縦に白色や黄色の線が走つてゐる、  
又頭には薄黄色の觸角を二本持つてゐる、此の觸角  
は感覺が大層鋭いので、凡て物に觸れて、其の物  
は何であるか、自分のために役に立つものである  
か、又は害になるものであるかを、早く知る役目  
をなすのである、此の二本の觸角の間に、黒色の  
點を持つてゐる。

からだは軟かであつて一面に黒い、短い、毛が  
はえてゐて、紫褐色の斑點を持つてゐる。

こんな形をしてゐる、くさかげろう、がどをし  
て、卵を産むのであるか、即ち、どをして、うど  
んげ、の花を此の虫が、こしらへるのかといふに、  
始め、からだ、の後部を木の葉や、幹につけて、  
尻から、軟らかな、飴の様な、粘液を出しながら、  
尻を上げらる、だけ高く、わけて、其の粘液で白

色の針の様な棒を木の葉の上に立て其頂上に卵をつけてるので、丁度きのこのまだ開かないのを見た様な形をしてゐる、斯の如きことを、幾度も繰り返すと、うどん



げの花が、できるのである、卵をかく産みつけて、後、間もなく卵は破れて（ハ）の如き幼虫が、はいでる此のときは卵が破るのですから俗にうどんげの花が開いた、と、いふのである、此のくさかげろうの幼虫は、益にもなれば、又、害にもなる、之れが蚜虫といふ害虫を食するから、農家は蚜虫の損害を免ぬかるゝことを得る、其の代りに此の幼虫は草木を食することも随分甚だしい、依て此の幼虫が澤山むらがる時には農家に害を及ぼすことは大したものである。

氣候が暖であつて萬事好都合な年には、幼虫を生ずることが特別に多く、秋に至れば冬越をする成虫が澤山できてくる。

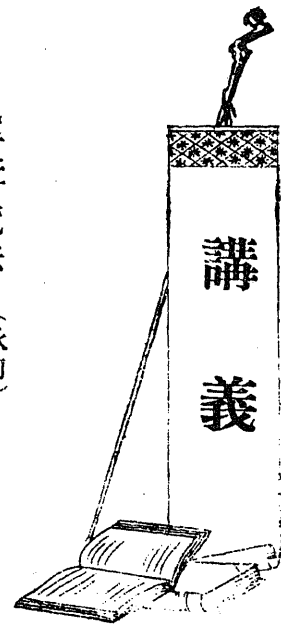
幼虫が充分發達すれば、其の住んでゐる所で、かなり堅い、まゆ、を作りて蛹となる此の、蛹が、

まゆ、を、かみ破りて成蟲となるのである、上に  
ある團の（イ）は、うどんげの花を示したので、  
其の左側の（ホ）は、うどんげの花の一つを大き  
くして見たのだ、又、うどんげの花の横にある（ハ）  
は此の花の頂きの卵が破れて出た所の、くさかげ  
ろう、の子供を大きくした所であり、又其横  
の（ニ）といふのは夫れが作つた、まゆ、であり  
まして此のまゆの内から（ロ）を見た様な、くさ  
かげろうが出て、くるので、之れが成蟲であつ  
て、うどんげの花をこしらえるのであります。

Steier-Tropfen höhle den Stein.

點滴石を穿り

記者申す。本號記事非常に幅濶せしにつき、英語俚諺解は掲載  
するを得ず。讀者、乞ふ諒せよ。



### 兒童研究法 (承前)

松本孝二郎講演

そこで極く幼い時分から。段々に發達して行き  
ます順序を追ふて、發達の順序を研究すると云ふ  
方法を執つて考へますならば、孰れの家庭に於て  
も兒童の發達史を作つて置くが宜い、これも母親  
が自分の家で私に書留めて置くものと、其家の歴  
史、其子供に取り立ての親より譲りものとなるべし  
やうなものと、此二つを書いて置く方が宜いやう